

AXIS—オリ主(宇宙バカ)inIS学園—

K\*485

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世でスクラムジェットエンジンを開発して宇宙への一歩を踏み出したがテロ組織によって宇宙船が撃墜されたエンジニア・宇宙飛行士系の宇宙馬鹿。

その強い意志と信念が評価され、生き様と死に様を哀れに思った神の手によって宇宙が近いラノベ世界へと転生させてもらえることに。

「インフィニット・ストラトス・・・？無限の成層圏か、いい名前じゃないか」※オリ主にIS原作の知識はありません

「金と設備もつけてくれた、もうロケット一から作るしかないよな！」

※オリ主は既存の宇宙開発がISによって崩れ去っていることを知りません

そんなオリ主が宇宙に行くためにすったもんだして原作をぐっちゃにしたりハーレム作ったり色々やるお話。

## 目次

リメイク前

プロローグ：イカロスが落ちた日 | 1

第一話：私は川でおぼれてる姉弟を助けただけなんだ！ | 6

第二話：ファースト・エンカウント | 12

リメイク本編

Re：イカロスが墜ちた日 | 16

物語の始まり | 23

二度目の高校生活 | 29

淑女とアホと宇宙馬鹿 | 34

リメイク前

プロローグ：イカロスが落ちた日

私は今、宇宙史に残る偉大な一步を踏み出そうとしている。

スペースプレーン計画、飛行場から発進して衛星軌道に向かうことができる「宇宙へ行ける飛行機」を作る計画だ。

カギを握っているスクラムジェットエンジンの開発に青春の輝きと20代の煌きのすべてをつぎ込んで、気が付けばもうアラサー。

ハイブリットロケットエンジンの燃料でランプを形成して……いや、専門的な話はあとだ。

スペースプレーンに必要な最初はスクラムジェット、途中からロケット推進を行える1つのエンジンを開発した男、それが私だということだけ認知してくれればいい。

とにかく、その記念すべき一回目の有人飛行に、メカニックとして今から乗り込むのだ！

タラップを上り、武骨な計器群が並ぶ座席と対面する。

エンジン内圧力計、推力計、燃料流量計、温度計。

『こちら管制塔、第三滑走路クリア。』

スペースプレーン、「イカロス」、そしてその母船で超高高度亜音速ジェット機「ダイダロス」。当然、私が乗っているのはイカロスのほうだ。

ダイダロスで高度1万5千m、速度M0.8まで加速、そこで母船からイカロスを分離して補助固体ブースターでスクラムジェットの稼働速度まで加速する。

M15でスクラムジェットの吸気口を閉鎖し、純粋な酸素を供給。成形固体燃料に点火して一気に宇宙を目指す。

『JADV-023ダイダロス、及びJADV-023Aイカロス。滑走路へ到着、エンジン始動。』

因みにJADVとは、Japan Advanced Aerospace Development Center、ここから適当

に文字を出してJADADV、ADが2つ被っているので1つに省略してJADV。ちなみに英文の意味は日本先進航空宇宙開発所である。

「D1-4全エンジン正常。推力上昇」

ダイダロスに積まれている4機のジェットエンジンがすべて正常であることをパイロットへ報告する。

「ブレーキ解除、発進！」

「全エンジン出力PHからTOへ、バランス正常。」

機体が動き出し、若干揺れながらどんどん加速していく。

高度計が回り出し、不安定な感じが増した。地に足がついていない感じ・・・離陸だ。

「テイクオフ！」

「エンジン出力TOからCRへ」

上昇を続けて太平洋上5000m・・・だが、ここで機内に警報が鳴り響く。

「ロックオンアラート!?!」

この独特の飛翔音・・・ミサイルだ。畜生、ここで私は終るのか？あれほど焦がれた宇宙に届かず、ここで散るのか？

「エンジン出力最大！」

「SOS, SOS, ミサイルで攻撃されている！SOS, SOS！チイ、イカロス緊急分離！」

イカロスを切り離してイカロスだけでも生き残らせるのか！

「緊急分離、自由落下します！」

窓から見える宇宙がどんどん遠ざかっていく・・・ん？

目に入ったのはこっちに向かって飛んでくるミサイル。

「ダメです、振り切れません！」

「コンチクショオオオオオオオオオオ!!オラア！」

本来スクラムジェット起動速度まで加速するための固体燃料ブースターを強制点火、ぐんつと体が後ろに押し付けられる。本来高度1万5千mでマツハ5まで加速できるはずだが、5千mの濃い空気の中だと本来の性能は発揮できない……！

パン！

音速を超えたときに衝撃波が発生して出る破裂音、だがブースターの燃焼はマツハ1.5ほどまで加速した時点で終わってしまった。

「コントロール戻します、You have control.」

「I have control. よくやった、早見メカニック！」

推進力を失ったイカロスは再び滑空を始める。

が、死の気配というか嫌な予感が止まらないのはなぜだ？

ビーツビーツビーツビーツ

「ロックオンアラート！」

「畜生、もう一発撃っていたのか！」

「回避機動！」

推進力を持たないので、位置エネルギーを運動エネルギーに変えて回避を敢行する。右へ左へ、絶え間なく変化するGがこの機体の複雑な運動を物語っている。

「ダメだ、よけきれない！」

パイロットの悲鳴、一介のエンジニアである私にやれることは!? ……ない。

爆発音が響き、視界が紅く染まる。

私、早見星夜の意識はここでぷつぷつと切れたのであった……

この日、国際テロ組織が「イカロス」撃墜を発表。宇宙開発の灯は、血生臭い軍事事業にかき消され、軍の庇護のもと細々と続けられることとなった。

ここは・・・？確かに私はミサイル攻撃に会ってイカロスもろとも塵になったはず。

無重力訓練のときのような浮遊感とホワイトアウトした視界。ああ、そうか。

「ここが死後の世界か。思ったより宇宙空間に近いのな。」  
そんなことをつぶやいていると、頭の奥に響くような声が聞こえた。

『左様、御主は死んだ。心亡き人間の悪意によってな。』

『普通の人間は死するとき魂が崩れ、そちらの言葉で言うリサイクルされる。が、お主のような強い意志を持つ者は、魂が崩れないことがあるのじゃ。』

「と、いいいますと？」

「いまいこの・・・神様だろうか？の言いたいことが分からない。故に、お主には選択権がある。すべてを失って輪廻の理に戻るか、あるいは輪廻の理を外れ再び生を授かるか、だ。』

転生というのだろうか？もう一度、届かなかった宇宙に手を伸ばせるチャンスが舞い降りてきたのだ、この機会を無駄にするつもりはさらさらない！

「是非とも再びの生を送りたく存じます！」

『よかろう。少しだけ、我らから贈り物がある。受け取ってから行くがよい。』

贈り物？転生できるというだけで十分すぎるのにこれ以上何を望むというのだろうか。

「ありがたいですけど、それはまた何故？」

『御主の生き様は見えていて気持ちが良い。御主が紡ぐ物語の続きを、我らに見せてみよ！』

1つ、御主の世界の輪廻から外れるが故、御主の世界によく似た世界へ送ろう。

2つ、身体や外見はできる限り前世に似せよう。

3つ、その世界特有のモノについての知識も授けよう。

4つ、御主の存在、それに付随する情報は自然な形で生成しておこ

う。

『第二の生、良く生きるように!』

至れり尽くせりだけど、そこまでされないといけない世界ってどんなヤバイ世界なんだ!?

「ちよつと待つて下さい、私は一体どこへ——」

『IS 《インフィニット・ストラトス》の世界じゃ。お主の物語、しかと見せてもらおう。』

なんじゃそりゃ? え、何処だよその世界って待つて意識が引つ張られt

「ここは・・・?」

前世と同じような手足。視界の端に映るのは慣れ親しんだ眼鏡のフレーム、だが度が入っていない気がする。むしろ良く見えすぎる? 何故だ。

視点の高さは前世の頃と変化はない、ということはこの体の身長は175cm前後ということだ。

周りを見回してみる。

前世の私の部屋と何ら変わらない配置でおかれた家具たち、だが中は空っぽになっている。まあ、当然か。むしろここまで用意してくれたことに感謝するべきだろう。

が、知らないはずの知識が無数に頭の中に流れ込んできている。I S コア、P I C? なんじゃそr——

膨大な情報の嵐に耐えきれず、私の意識は再び闇の中に落ちていった・・・



第一話：私は川でおぼれてる姉弟を助けただけなんだ！

鈍い頭痛がする頭が再び回り始めて、意識が覚醒する。

瞳の奥に映るのは、膨大なデータで構成された宇宙用マルチプラットフォームフォームスーツのイメージ、転生前に聞いた世界の名前と同じ——インフィニット・ストラトス。無限の成層圏と名付けられたそれは、既存の概念を打破するすさまじいものだった。

開発者がまだ高校生であるというのも驚異的だが、特筆すべきはパッシブ・イナーシヤル・キャンセラーだろう。

慣性力の働きを阻害する、つまるところヒッグス粒子の影響低減というアプローチで重力の影響を減らして空へ飛び立つという代物。

それだけではなく反重力生成機構……ここは通常の飛行機の揚力、つまり翼の役割に相当するので反重力翼と呼称しようか。それによる上昇力発生や流体波への干渉……重力波と言ったらいいのか？とにかく重力を手中に収めたような素晴らしい理論の数々。

いやー、素晴らしい。本当に、素晴らしい。ただ気になるのは壁にあるカレンダーの日付は20YA/4/17なのに対して発表日が20YA/8/13とあること。あと4ヶ月か、あと4ヶ月でこの素晴らしいマシンが……いや、自意識があることを考慮して、そのうえで船には女性の神様が宿るといふ伝説を参考に「彼女ら」と呼称しようか。彼女らが羽ばたくのか……

それはそれとして。

「金集めてロケット作りますかねっつと」

そういえば、付随する情報は自然な形で生成しておくとか言ってたな。住民票やら免許証やら通帳、保険証とかちゃんと用意されてるのだろうか？

「家具とかはサービスしてくれなかったのね。」

今いる家の外見は普通の市街地に佇む普通の一軒家。中身は何と  
いうことでしょうか、何もありませんか！内装はまだ無いそう  
です、はい。

「下らん洒落言ってる場合じゃない、買いに行かないと（使命感）」

神様謹製のボディで風のように駆ける！

ベッドすらなかったので今日中に寝具一式買わないと快適に眠れ  
ない、流し台とIHコンロこそあれど肝心の鍋がない！レンジもない  
！あつたかい飯が食いたくば買うしかない！あ、冷蔵庫と食材も買わ  
ねば。

あ、ちなみにだが靴はあった。よかった、裸足で走り回る不審者、住  
宅街に現る！みたいなことにならなくて。

坂を下って橋を渡ったら家電量販店はすぐそk

「子供が流されてるぞー！」

なんですと!?

家電はあとだ、土手に降りられるところは・・・あつた！BBQ場  
入り口。

「今助けるぞー!!警察と万一に備えて救急に連絡お願いし  
まああああ・・・」

「分かった、えーと1, 1, 0って早!？」

周囲の人に驚かれようが人命救助が先決なので無視！

浅瀬の水を蹴散らし、腰の深さの水を掻き分け、全力で泳いで一直  
線におぼれている男の子と女の子のところへ向かう。

まだ中学生くらいの子が、流されないようにとしつかりまだ  
5, 6歳の男の子を抱きかかえている。ああ、何と美しい姉弟愛だろ  
うか。

「確保！しつかり捕まってるよ、二人とも・・・あれ?」

見れば半分意識を失ってる、不味い、低体温症だ！

大急ぎで二人まとめて横抱きにして岸まで連れていきました。濡  
れたシャツが風に吹かれてかなり寒い。・・・と思ったがこの体の発  
熱量？保温能力？が桁違いなのか、体温はあまり下がっていない。そ

れはいいんだ、いいことなんだけど・・・二人ともくっついてきてはなれません。意識ないみたいだからただ暖かいところへ本能的に向かっているだけなんだろうけどさあ。

・・・女の子、それも思春期入りたての子が知らないおじさんに引っ付いてたことを知ったら発狂するだろうなあ・・・

「大丈夫ですか?!」

「あっはい、この子たちをお願いします。」

「分かりました、貴方は両親ですか?でしたらお名前「ああすいません、流されてるのを見て駆け付けた通りすがりの一般人です、ハイ。」そうですか。人命救助に感謝致します。誰か、この子たちのご両親を見かけませんでしたか?」

よし、これで一安心つと。で、だ。このびしょ濡れの服どうしよう。洗濯機も着替えもないんですけど。

仕方なく家に一度帰る途中・・・財布すらなかったからマジで何のために外出したんだって話だけど。通帳に予算くらいは用意されてるとイイなあ(願望)

「あらまあ!どうしたの濡れ鼠になっちゃってえ」

お隣の田中さんのお宅から奥さんが出てきた。それもそうか、良く晴れた日にずぶ濡れのおっさん(不審者)が歩いていたらそりやあ声かけるわな。

「いやー、流されてる子供助に川に入って、今取り敢えずうちに帰るとこなんですけども・・・はあ。(クソデカ溜息)」

「そんなに大きなため息はいて。幸せが逃げていくわよ?」

「いやー実はかくかくしかじか」

「ええっ家具も何もない家にほっぽり出された?それも着の身着のままで?・・・うちのお風呂と洗濯機貸しましょうか?」

田中さんがイケメン過ぎて辛い。

「いえいえ、悪いですよそんな。着替えもないですし」

だがここは丁重にお断りさせていただく。お風呂をを借りて服を選択すると着る服がなくなるから事故る(確信)

「主人の服を貸しますわよ、ささあがってあがって」  
「えつちよ」

はい、田中家の脱衣所に突っ込まれました。え？ご厚意に甘えちやつていいんですか？

「あつ入ったら教えてくださーい、洗濯機回しますよー！」

洗濯までやってくれるそうです。こうなったらやることは一つ。

濡れて肌に引っ付く上下を脱いで、風呂場に入る。

「入りました。本当にありがとうございます！」

ガラツゴソゴソ

「いえいえ、「困った時はお互い様」ですよ」

洗濯物を動かす衣擦れの音が聞こえる、本当に洗濯までやってくれるのか……

冷えた（そこまでではないが）体に熱いシャワーが染み渡る

ただいま我が家、さてと。通帳探ししますかね……（そもそもない可能性には目を瞑る）

結論から言うとありました。階段下収納にごつつい金庫があつて、その中に免許証やら保険証やらと一緒に突っ込まれてました。

……残金1000万円ってまた適当に数字入れたらろって感じが……いや1000万ももらつておいて文句は出せない身分なわけですけども。

そろそろ腹の虫が騒ぎ出すころ、適当に街角の銀行に突撃して適当に下ろしてつと。続けて家電量販店と家具屋へ突入！

自宅へ配送するようにして、ヨシ！

あつ

届くまでの間レンジも冷蔵庫も使えないわ。無いんだもん。なにがヨシ！だよ……

取り敢えず届くまでの間はコンビニ飯で凌ぎますかね。

一週間ちよい後

とりあえず表計算ソフトおよび文書作成ソフトが入ったノートパソコンを購入。ついでにW i l f i 関連も整えた。早速、「次世代型推進機構に関する十三の課題と解決方法の提案」というタイトルで論文掲載サイトに投稿して反応を見よう。ラムジェット・スクラムジェットの必要性和実用化への課題を書き記したものだ。

ピンポーン！

お、来客だ。インターホンを通話モードにして様子を見る。

「はい、どちら様—？」

おう、オオカミみたいな印象を受ける制服姿の美少女。見覚えがあるような無いような。

「織斑千冬と言います、先日助けていただいた・・・」

ああ、そういうことか！あの時の女の子か！おk把握、それなら確かに見覚えがあるわけだ。

「ちよつと待ってね、今開けるよー」

あかん、お茶もお茶菓子も用意してない。

ガチャツ

「見ず知らずの私たちを助けていただき、ほんつとうにありがとうございますございましたー！」

おお、最敬礼。

「うん、元気そうで何より。まあ上がって、まだ越してきたばかりで何にもないけどね。」

「そんな、ここ結構ですよ。」

「ああ、あと敬語堅苦しくて苦手だからタメでいいよ。自己紹介・・・はしなくていいか、気軽にせーやにいつでも呼んで（冗談）」

「わかりま・・・分かったよ、せーやにいい。ほら、一夏も！」

冗談のつもりだったんだけど・・・そしてさつきから千冬ちゃんの

後ろに隠れている少年は・・・ああ、あの時一緒に助けた弟君か！一夏君ね。

「ありがとう、せーやにー！」

好感度バグってないですかね？たまたま通りがかったから助けただけだよ？

---

今日の糖分補給用のチョコパイと麦茶（常備）を振舞って、軽く雑談して2人には帰ってもらった。

で、だ。

「とりあえず銃口を突きつけるのやめてもらえませんかねえ・・・」

## 第二話：ファースト・エンカウント

やあ！みんなのせーやにいいこと早見星夜だ。  
で。

ただいま絶賛命の危機である。後頭部に銃口、両手は一応上にあげている。

「五月蠅い、ちーちゃんにすり寄る害虫風情が！杜撰なマッチポンプで取り入ろうって魂胆だろう!？」

声色からして女性、しかもかなり若い。ちーちゃんとは千冬ちゃんのことだろう。呼び方からして千冬ちゃんとかかなり親しい立場で、しかも銃火器を平然と手に持っているから裏の人間か？銃を突き付けてきている人物の把握はこんなもんでいい、動機についてだ。

マッチポンプか。確かに、先日の救出劇はいささか都合が良すぎた。たまたま二人が溺れて、たまたまその日の朝に私が越してきた（という設定）、しかも全力で走って向かっていた・・・不自然にもほどがある事件だった。

御膳立てされすぎているので一連の流れを誰かによって仕組みられたと考えるのは自然なことだ。で、その立案者としての第一候補が、一番得をする・・・二人の好感度を稼ぐ、つまり私だと。二人の好感度を稼ぐぐらいしかメリットが見つからなかつたが、裏の人間がいるということは護衛対象か何かだろうか？

だがマジで偶然だ、だって私はさつきまで彼女たちの名前すら知らなかつたんだから。

「ただの偶然だよ、まあ偶然にしちゃ出来過ぎてた気がしないわけではないけど。というか二人つてもしかして有名人・・・？」

「・・・その様子だと本当に知らないみたいだね・・・あれ？じゃあもしかして束さんのことも知らないのかい？」

「束？聞き覚えがあるような無いような。すまない、フルネームを教えてくださいませんか？」

まさか、ね。確か、ISの開発者の名前は――

「稀代の大大災、篠ノ之束」

篠ノ之束。ご本人さんですかね？

「ちよつと待つてくれ。もしかして宇宙用マルチプラットフォームスーツの開発とかつてしてたり「なんだ、知つてたのか。で？どうせこの束さんにちーちゃん経由ですり寄ろうとしたんだろ？」」

なるほど（無駄に早い理解）。つまりどこ個人でパワードスーツの設計開発を行えるその天才的な頭脳を狙われてスカウトとか身近な人間への媚売りが絶えない、と。裏の人間ではなく、裏に近いグレーで銃火器位自作できるってことか。銃を携行している必要があるということ。

これは前世の俺と同じくテロリストとかに誘拐されかけたこともあると見た。

おかしいな。確か、ISが世に認知されたのはもう少し後だったよ  
うな？あれ、だとすると「知つてたのか」のリアクションはおかしい。

「少し調べたいものができた、PCを使わせてくれ」

「え？ああ、いいけど。なんでわざわざ——ああ、生殺与奪は束さんが握つてたんだっけ。いいよ、多分おまえは悪い奴じゃないだろうしね。」

さっきの質問と私の紳士的な対応（自称）によって毒気を抜かれたのかは知らないが、後頭部の鉄の塊の感覚はなくなり、カチャカチャとしまつような音まで聞こえてきた。取り敢えず生命の危機は去つたということかオーケー？

丁度来客前まで開いていた論文掲載サイトを出して・・・

なんか視線を感じる。気のせいかな。

宇宙空間 マルチプラットフォームスーツ 検索

あつた、引用数も閲覧数も少ないけど「宇宙空間利用可能な汎用マルチプラットフォームフォームスーツ—インフィニット・ストラトス構想—」つてのがヒット。

発表はされているけれど世間がまだ認めてないってことか。

ふむ。

何かしらの認知度を上げるイベント、大手の組織が正式に購入を打診したり、それによる大規模な報道的なサムシングがあつたと考える



べきだろう。

そこまで考えてから博士のほうに向きなおると、顔がすぐそばにあった。

「うおっ!？」

おおう、すつげえ美人さん。ずっと背中を向けていたから顔を直接見てなかったのもあるとはいえ、かなり驚いた。前世は女運に恵まれなかったからな、息遣いが聞こえたり髪が触れるほどまで接近されることがなかったので一種のパニック状態に陥っている。

「ん？ああ、気付いたのか。さっきのページ見せろ。」

顎に指をあてて思案顔。要求は最初に立ち上げていた自分の研究資料……？

何かを考えられるほど今の私は冷静ではないので、取り敢えず素直にブラウザの履歴機能で自分の論文を再度表示する。

「ふむふむ。……気に入った！お前、名前は？」

「早見星夜です。」

思わず敬語が、私はパニックになると咄嗟に人から距離を取るために一線を引いた言葉遣いになるのだ。

「せーや……じゃあせーにいで。改めて、ちーちゃんといっくんを助けてくれてありがとう。そして、いきなり銃を向けてごめんなさい。害がある人間だったら排除しようと思ってたんだけど、せーにいと仲良くなれそうな気がする！東さんリーダーにビビッと来たんだ、よろしくね！せーやにい！」

「あ、うん。宜しくお願いします東博士。」

「ノンノンノン！硬い、硬いよ！敬語禁止！あと「東」って呼んで？」

「分かったよ東博士」

「リピートアフターミー、たばね！」

「……東。」

「うん！じゃあねー、近々また来るよー！アデュー！」

我に返った時には、全てが終わっていた。

ただ開け放たれた玄関から、春の風が優しく吹き込んでくる。

「嵐のような人だな、束って。」

そう呟いた一言は誰もいない外へ流れていった。

## リメイク本編

### Re：イカロスが墜ちた日

私は今、宇宙史に残る偉大な一步を踏み出そうとしている。

スペースプレーン計画、飛行場から発進して衛星軌道に向かうことができる「宇宙へ行ける飛行機」を作る計画だ。

カギを握っているスクラムジェットエンジンの開発に青春の輝きと20代の煌きのすべてをつぎ込んで、気が付けばもうアラサー。

ハイブリットロケットエンジン——ああ、これも特許を持っている——の高い信頼性を生かして……いいや、専門的な話はあとだ。

スペースプレーンに必要な最初はスクラムジェット、途中からロケット推進を行える単一のエンジンを開発した男、それが私だということだけ認知してくれればいい。

とにかく、その記念すべき一回目の有人飛行に、メカニックとして今から乗り込むのだ！このエンジンの扱いについて、私の右に出る者はいない。

タラップを上り、武骨な計器群が並ぶ座席と対面する。

エンジン内圧力計、推力計、燃料流量計、温度計、ドップラー式噴流分析器他……素人目には訳が分からないごちゃごちゃした数値の集まりだが、私にとっては違う。これだけあればエンジンの様子が透けて見える。

『こちら管制塔、第三滑走路クリア。』

スペースプレーン、「イカロス」、そしてその母船で超高高度亜音速ジェット機「ダイダロス」。滑走路の上で翼を震わせ、羽ばたく時を待っている。当然、私が乗っているのはイカロスのほうだ。

ダイダロスで高度1万5千m、速度 $M_{マッハ} 0.8$ まで加速、そこで母船からイカロスを分離して補助固体ブースターでスクラムジェットの

稼働速度まで加速する。

M15でスクラムジェットの吸気口を閉鎖し、純粋な酸素を供給。成形固体燃料に点火して一気に宇宙を目指す荒鷲。それこそがイカロスだ。

『JADV-023ダイダロス、及びJADV-023アイカロス。滑走路へ到着、エンジン始動。』

因みにJADVとは。Japan Advanced Aerospace Development center、ここから適当に文字を出してJADV、ADが2つ被っているので1つに省略してJADV。英文の意味は日本先進航空宇宙開発所である。23はこいつが23番目の航空機だからだ、深い意味はない。

「D1-4全エンジン正常。推力上昇」

ダイダロスに積まれている4機のジェットエンジンがすべて正常であることをパイロットへ報告する。

「ブレーキ解除、発進！」

「全エンジン出力ブライマルヒート P HからTOへ、バランス正常。」

機体が動き出し、若干揺れながらどんどん加速していく。

高度計が回り出し、タイヤから伝わる振動が消えてエンジンのようなりだけになる。離陸だ。

「テイクオフ！」

「エンジン出力TOからクルーズCRへ」

———？

上昇を続けて太平洋上5000m・・・万事順調に思えた。が、ここで機内に警報が鳴り響く。

「ロックオンアラート!?!」



ぐんつと体が後ろに押し付けられる。本来高度1万5千mでマツハ5まで加速できるはずだが、5千mの濃い空気の中だと本来の性能は発揮できない……!

パン!

音速を超えたときに衝撃波が発生して出る破裂音、だがブースターの燃焼はマツハ1.5ほどまで加速した時点で終わってしまった。それでもミサイルのロックオンは二段加速についていけなかったようだ、警報は途切れた。

「コントロール戻します、You have control.」

「I have control. よくやった、早見メカニック!」

推進力を失ったイカロスは再び滑空を始める。帰ろうか、宇宙港へ。

なぜだ? 死の気配、嫌な予感が止まらない。

ビーツビーツビーツビーツ

レーダーや計器を睨み付ける……レーダーにかすかに反応、位置は真後ろ!?

「ロックオンアラート!」

「畜生、もう一発持ってやがった!」

「回避機動!」

攻撃を行ってきた敵戦闘機は、ミサイルを2個持っていた。ただそれだけの、当たり前のこと。戦闘機がミサイルを持つとき、両翼に1本ずつ。ただ滑空しているだけのイカロスに追いつくことはたやすかっただろう。

砕け散りそうなほど奥歯をかみしめる。

推進力を持たないので、位置エネルギーを運動エネルギーに変えて回避を敢行する。右へ左へ、絶え間なく変化するGがこの機体の複雑な運動を物語っているが、相手は高機動ミサイルだ。

「ダメだ、よけきれない！」

チーフパイロットの悲鳴、一介のエンジンニアである私にやれることは、もう、ない。

爆発音が響き、視界が紅く染まる。

私、早見星夜の意識はここでぷつぷつりと切れた。

この日、国際テロ組織が「イカロス」撃墜を発表。この世界の宇宙開発の灯は、血生臭い力にかき消され、軍の庇護のもと細々と続けられることとなった。

— ? —

ここは・・・？確かに私はミサイル攻撃に会ってイカロスもろとも塵になったはず。

無重力訓練のときのような浮遊感とホワイトアウトした視界。ああ、そうか。

「ここが死後の世界か。思ったより宇宙空間に近いのな。」

そんなことをつぶやいていると、頭の奥に響くような声が聞こえた。

『左様、御主は死んだ。心亡き人間の悪意によってな。』

いわゆる神、という奴だろうか。

『お主にはチャンスをやろう。すべてを失って輪廻の理に戻るか、あるいは輪廻の理を外れ再び生を授かるか、だ。』

転生というのだろうか？もう一度、届かなかった宇宙に手を伸ばせるチャンスが舞い降りてきたのだ、この機会を無駄にするつもりはさらさらない！

「是非とも再びの生を送りたく存じます！」

この声の主が神だろうが悪魔だろうが、何でもいい。一度終わってしまった私をよみがえらせてくれるというのだ、受けない手はない！  
・・・が、少なくとも人あるいはそれに類する存在に生まれ変わることを期待してもいいだろうか？さすがに虫への転生だったら困る。

『よかろう。少しだけ、我らから贈り物がある。受け取ってから行くがよい。』

・・・今更だが、普通に心の中を読まれていないか？先ほどのすごく失礼なことを思った記憶があるのだが。

「前世の記憶、技術に関する一部だけでもいいので引継ぎと、健康な肉体。あとは・・・宇宙を追い求める心。この3つだけは求めたいです。」  
『欲がない・・・いや、どこまでも純粹に強欲じゃな！よかろう、完全な記憶の引継ぎ、折れない心、そして最高の肉体を用意しようぞ！

御主の生き様は見ていて気持ちが良い。御主が紡ぐ物語の続きを、我らに見せてみよ！』

「いや、それさえあればまた何度でも宇宙を目指せるのでそこまでいらない——

『なんとなんと、それは失礼した！せめてもの償いに、より宇宙へ近い世界へと送ってやろう！』

もしかしなくても人の話聞かないのか神様という奴h・・・だめだ意識が落ち・・・ r・・・

？

「(っ)は・・・？」

前世と同じような手足。視界の端に映るのは慣れ親しんだ眼鏡のフレーム、だが度が入っていない気がする。むしろ良く見えすぎる？



体もこころなしが軽い。

・・・これが、神様基準での最高の肉体か。肉体年齢は20歳・・・いや、10代でも通じそうなほど若々しい。

目線も少し高くなった気がする・・・前世は170cm代前半だったが、170後半に届いていないだろうか？

こうして、ある世界でイカロスが散った日。その魂は、別の世界へと送られた。

宇宙を目指す天災兎や鈍感主人公と宇宙馬鹿な彼の運命が交わりだすのは、もう少し後の話。

## 物語の始まり

「素晴らしい、素晴らしいぞこれはー!」

私、早見星夜は歓喜の中にいた。前世の中学生のころ、仲がいい叔父の私有地の一角を借りて作った研究室。学生生活の間中、小遣いやバイト代のほぼすべてをつぎ込んで少しずつ広げて行って、職に就いたとき泣く泣く別れた思い出の部屋。それが今、目の前にある。

ただし、数段アップグレードされた姿で、だ。

正式に割り当てられた研究所の設備が、不釣り合いなぼろぼろの木製の壁を背にして佇んでいる。

「前世では神を否定こそしていなかったが、大した信仰も持ってなかった。だが、今ははつきりと言える! 神様、ありがとー!!!」

ああ、もう駄目だ。今すぐにも宇宙に飛び出せそうなほどの情熱的な衝動と、懐古的な・・・いや、言葉はもう無粋だな。

今私は、宇宙に憧れる少年なのだから。

———?

今更だが、神様が用意してくれた設定を確認しよう。

この世界には本来「私」はいない。にもかかわらず、私の戸籍などの情報が存在する。他でもない神様の手によって付随する情報が生成された・・・あってますよね神様?

遠いどこかで神様が親指を立てているような気がするので、このまま進めよう。

両親は蒸発したということになっている。まあこれはそもそもいないから致し方ない。

これまでの経歴は両親の失踪後、親戚を転々としたが、成人したのをいいことに自立を強いられ、交渉の末に維持が困難な山一つを餞別にもらった・・・らしい。

まあ、ここまではいいだろう。

あの・・・総資産が億単位なんです・・・

いやまあ確かに、宇宙開発というのは場合によっては兆単位の金が動く一大プロジェクトですよ？

だから私はまたチームを集めてとか十数年単位の計画になることを覚悟してたんですよ？

・・・何故かそんなことはいいから早く宇宙へ行く姿を見せろと言いたげな神様の姿が脳裏に・・・

えー、いくら私がエンジンの設計者だからと言ってロケット丸ごと、個人には少々荷が重いといえますか。

・・・

やってやろうじゃねえか！

？

この世界に降り立ってから丸二年の時が過ぎ、宇宙への道のりはついに最終段階となった。

まあ、無駄に社長だの所長だのといった肩書が増えたが・・・それも含めてこれまでの軌跡を順を追って話そう。

転生してすぐ、無数の論文を漁って、唯一オーパーツと言える超科学が用いられた宇宙用マルチプラットフォーム・パワードスーツ「インフィニットストラトス」を見つけたのだ。

ISコアの解析は少なくとも地球由来のものではないと判明した時点で中断したのだが、これはどうでもいい。

スクラムジェットに関する情報を小出しの論文にして発表する傍ら、前世で見た有用そうなロケットエンジンをついで片っ端から一通りシミュレート・試作してデータを採ったりした結果、ある結論に至った。「ISの技術を可能な限り流用することが最も早く宇宙へたどり着ける」と。

燃焼実験の期間中に、当然といえば当然なのだが大量に燃料を扱う必要が出て、一つ目の会社「ヒドラ燃料」が発足したりしたのだが、まあ些細な問題だ。

・・・割と現在の収益の大きな部分を占めているのについては・・・些細とは言えないな・・・

いよいよ拡大していく研究所に「JADV」の名前を引き継がせ、篠ノ之博士とは別の方式、シールドエネルギーと電力の両方で動作する反重力ドライブを実用化したり実験型エンジンを実用に耐えうるよう改良したりしていたら、2年の間に公に認知されてしまった。

最後に、ロケットを実際に運用するための形式上の組織として始まった「A—Xスペースステクノロジーズ」

とある事情から傘下の企業はとてども——とてどもとてども、多い。これについてはおおい話そう。

3つの組織のトップを兼任した結果、資源と金と時間を余すことなくつぎ込み——ああ、人、つまり従業員が登場しないのは情報が洩れて前世の二の舞になることを防ぐために意図的に行っている——遂に完成したのがこいつだ。

四号試作機

「X—4」、インフィニットストラトスとしてみるなら第1世代だが・・・あいにくといつはISではない。社名を冠して「Anot her Experiment al」、AXとでも名付けようか。D・干渉エネルギーをDEM直接変換型反物質炉、を經由して使用することで事実上の活動時間無制限を実現した。

あ、当然SE利用のISEミュレートモードも実装済みだ。

全身装甲、おまけに非固定浮遊部位アンロックユニットを持たない代わりに背中にD—R DE（小型で高効率・高推力なロケットエンジン）を宇宙空間巡行用に、小型のスラスタをいくつか姿勢制御用に備えるだけのシンプルな本体とヒートシールドバック・観測バック・大気圏内巡行バック・工学パックなどを必要に応じて取り出す方式をとっている。

「エネルギー充填率87%、量子化燃料タンク充填100%。」

ISCC（国際宇宙管制センター）へ予定航路およびリスク領域か

らの衛星群の回避指示を出させている間にゲートの開放とΩ<sup>オメガ</sup>ネットワークへの接続、およびネットワーク上の通信アンテナをアクティブートしておく。

「メインゲート開放、セキュリティゲート開放。進路オールグリーン」  
ああ、空が見える。今からあの蒼を切り裂いて、宇宙へと飛び立つのだと思うと興奮が止まらない……

『バイタル：緊張状態を確認。鎮静剤を使用しますか？』

「結構、ただの興奮だ。さて、冷却系、および対宇宙線防護システム異常なし。対デブリ衝撃吸収装甲展開確認、よし。」

『打ち上げシークエンス、最終段階。カウントダウン開始。』  
いよいよだ。

『5, 4, 3』

最終システムチェック。

『2, 1』

反重力ドライブ起動、出力正常。

『L i f t o f f !』

重力アンカー解除！操縦者加速度軽減！

発射台の電磁固定装置から解放されたX-4は、わずかな空気を切り裂く音とともに上へ落ち始めた。

重力を相殺するのではなく、負の重力を生成する反重力ドライブのなせる業。

ロケットエンジンを日本及び他国のレーダー網に引っかからないので面倒な手続きやら監査やら制限やらを丸ごとスキップすることができ——え？法律違反？ばれなきやいいんだよ。

※この物語はフィクションです。個人でロケットを打ち上げる時には、しかるべき手続き・安全管理や資格を持った監督者の下で行いましょう。

反重力ドライブと光学迷彩を使って、衝撃波を出さないよう亜音速で上昇を続けて高度10km。

「出力リミッター、解除。D—RDE起動。」

ジェット機が巡行する世界に、音速を超えた破裂音が響いた。

今積んでいるステルスパックだけではレーダーからは逃れられても、音や目視では補足されてしまうが、ここまで来てしまえばひと安心。エンジンをふかして、派手に上昇を始めるX―4、高層の雲を切り裂いて、二対のらせん状の炎が一直線に宇宙まで向かう。

そして、高度100km。宇宙との境界線は、実にあっけなく踏み越えられた。

?

一方そのころ、地上では。

「藍越学園、藍越学園……ここか？」

物語が動き出そうとしていた。

?

「は？事実上の出頭命令？」

X―4の稼働データからX―5、αパッケージのメンテナンス・補充を行っていた時のことだ。

出頭？誰が？私が？……これは少々不味いかもしれない、もし出頭理由が領空侵犯やらあまたの不届が原因なら私の宇宙生命が終わってしまう……！

「あ、え？何の用件で？」

一応すつとぼけてみるが、果たして……

「なんだ、ニユース見てないのか？ISの男性操縦者が見つかったんだよ。それで他にもいないか一斉検査中だとき。どうせブリュンヒルデの弟だからってだけなのに、まったく……」

「へ？」

え、そもそも要件違うの？

―早見移動中―

親切な配達員さん曰く、もう日本国内であらかた検査は終わったが、山奥やら過疎集落やらへの通達が遅れているんだそう。で、この地方ではうちがラストだったようだ。ちなみに連日テレビで報道されていたので終始相当な変人を見る目を向けられていた。

そんなことを回想しながら駅から歩いて数分。

「これがISか……」

A Xが私の子だとするなら、I Sはさしずめ姪に当たるのか？そんなしょうもないことを考えている私の胸中を知ってか知らずか、国産第二世代I S「打鉄」は何も言わずに佇んでいた。

「軽く触れるだけでいいですよー」  
「どうも。」

I S関係者と思われる女性に目礼して、ポンつと何も考えず腕のあたりに触れる。

途端にI Sのイメージ・インターフェイスを通じて伝わってくる情報の群れ。ふむふむ。

「量子化は認められず、やっぱり駄目みたいですねー。．．．あれ？でもこのグラフ．．．ちよつと待つてください、ああ待って、ちよつと、まっつてえええええ！」

おつと、つい足が研究所へ。I Sの制御系の情報はA Xを大きく進歩させると思ったんだが、検査がまだ終わっていないなら仕方ない。

「．．．すいません、無意識に足が家（兼研究所）へ」

「帰りたいところすみません、数値の一部が気になったので精密検査に移ります。もう少しお付き合いますねー。」

さっきの現象について考えるか。A Xの開発のせいで私自身がI Sに親和性を持っていても何ら不思議ではないのだろう。

だがしかし、それ以前の問題として私は男だ、適性を持つ織斑君のような例外にはなりえない。

「えー、確認しました。暫定適正ランクC？、非常に微弱ながらあなたにはI S適性があります。」

——えっ？

## 二度目の高校生活

IS学園。正式名称『国立インフィニット・ストラトス学園高等学校』。生徒は全員女性で、職員ですら用務員と警備員を除いてすべて女。

・・・どう考えても私は場違いだろう!? ついでになぜ私は生徒にされているんだ!? 誰か教えてくれ、そしてできれば研究所へ帰らせてくれええええ!!!

?

暫定IS適性、ISをどれほど意のままに操れるかを示す数値。A＋～Dまで、A＋の上にSを入れたランクで表されるが、私と織斑一夏君を除くすべての男性は適性D。そもそも動かすことも纏うこともできない。

織斑君がB、完全にイレギュラーだ。ある程度思うがままに動かせるほどの適性があるらしい。

で、私がC―。あの検査の後、適性があるなら何とかすれば装着できるのでは、といろいろ試した結果、「特定のコアを使用し、かつ私が精神的に受け入れ、さらに仮想コンソールで装着コマンドを送信した」場合に限りISを扱うことができる。

通常、最低限扱うことができるものをCとするので、C―というのは実に現状をよく表している。

そして、神様に与えられた私の頭脳が導き出した今後採るべき行動は・・・

夜逃げ、であった。

いや、いずれ身柄が確保されるのは決定事項だとして、私の管轄下の組織群はどうなるのかを考えた結果の合理的な判断だ、決していやになって逃げたとかの格好悪い理由ではない。

JADVは解体された、という体で忽然と姿を消した。

ヒドラ燃料は代理人を立てて社長は引退したことになった。

そして、最後のAXスペースステックはというと・・・夜逃げに失敗



した。

表舞台から去るのには規模が大きすぎたのだ。

それもそのはず、AXグループは女尊男卑やISの登場によって職を奪われた企業・組織・団体などを吸収し続けて、利益こそ赤字だが国際軍事産業の最後の防波堤となっていた。

いや、ISの登場によって通常のミサイルがお役御免で、その結果行き場をなくした軍事メーカーを技術の接收目的で吸収したのが始まりだったんだ。

急進を続けるヒドラ燃料、その提携を受けているAXグループは宇宙工業分野での事業拡大と提携強化を狙っている――

その噂が業界内を一周し、噂のことに気づかなかった私が来るもの拒まずの精神で3社4社と受け入れた結果、知らず知らずのうちに噂を裏打ちしてしまった。

何かがおかしいと思い始めたときにはもう遅く、新規流入は止まらなくなっていた、もう手遅れ。

国外からは、Zスペース、フロンティアギャラクティック、独系軍事メーカー シュタットメタルにウエスタリアークラフト、果ては某国の宇宙開発部門が丸々転がり込んできたり。

国内からも五角重工、十六夜化成に代表される無数の会社を傘下に置く巨大国際企業連合となっていた。

どうしようもなかった。

私は開き直すことにした。そう、私自身をAXスペーステック所属ということにしてしまおう。

気が付けば日本国籍は抹消されているし、このままでは世界各国の研究機関にモルモットにされる、ならばもうこうするしかないじゃないか。

まあ、諜報機関の実働部隊 実力行使をされて、何とか逃げおおせるも私の身を守る手段が皆無であることに気付いんだがな。

A X傘下には軍事メーカーもあるが、今すぐ無から私兵を作り出すのは不可能。時間稼ぎのために一時的に私の身柄を預かってくれるところ――

建前上とはいえ、その土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと関係者に対して一切の干渉が許されない場所がある。

そう、IS学園だ。ちようどいいことに国連から「IS学園に来い(意識)」というお達しがあった。

・・・そこまではいいんだ、そこまでは。

「私はもう22だ！せめて生徒以外、職員とかあつたのでは!？」

そう、早見星夜22歳。高校生をやり直すことになってしまったのだ。

――？

目立っている、とても目立っている。

そりやそうだ、周りのどこを見ても女子高生、そんな中一人頭を抱えるどう見ても学生ではない男がいるのだから。

おっと、教師だろうか？若干背が低く、ややずれたメガネがどうにも優しそうな印象を与える。そして胸が大きい。

一瞬目線が吸い寄せられかけるが、手に持っているのは示し棒とプリント類。間違いなく担任、または副担任。教師に不埒な目を向けるわけにもいかないので、ただ静かに待つことにした。

「全員揃ってますねー。それじゃあショートホームルームをはじめますよー」

そう言つて自己紹介を行つてくれた山田真耶先生。予想通りクラスの副担任だそうだ。・・・うん？どこかで見た名前のような気がする。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね！」

「よろしくお願ひします。・・・ん?」

やたらと良く通る自分の声、それもそのはず教室のだけれもが妙な緊張感に包まれて無言だ。

「はー！」

返事を返したのが自分だけだったからか、こちらへ微笑みかけてくる山田先生。

若干照れ臭くなって視線を逸らす。

「それでは、出席番号順に自己紹介をお願いしますねー」

・・・自己紹介ねえ、人とかかわりが今世では致命的に少なかった、一応何を言うか考えておこう。

「織斑君、織斑一夏君！」

「はえい!？」

ガツチガチに緊張している織斑君。無理もない、女所帯に男一人はつらいだろう。

自分も入れて二人だった・・・それはそれとして、山田先生。緊張が移ってます、生徒相手にそんなに頭を下げないほうが。

そして肝心の彼の事故紹介（誤字にあらず）はというと。

「え、えつと織斑一夏です。よろしくお願いします。・・・以上です！」

かわいそうに、言うべきことが全部吹っ飛んで開き直ったようだ。一仕事終えたような雰囲気をもとっているが、も「もう少しまともな自己紹介はできんのか、バカ者！」なかったのか・・・うん、言いたいことは全部言われてしまったな。

そのあとの重い打撃音、それにどこか織斑君に似た顔立ち。そして圧倒的な強者の気配、真の通った強さと狼のような気高さを感じる。すさまじいカリスマだな、ブリュンヒルデ世界最強は。

「げえっ!?!関羽!？」

そしていくら姉弟とはいえあんまりな言い草、一夏君は相当な逸材か、それとも「誰が三國志の英雄か、バカ者」ただのバカのほうだったようだ。

・・・ただ、口よりも先に手が出るのは教育者としてはマイナスポイントだな。

「織斑先生、会議のほうは終わったんですか？」

「ああ。山田君、クラスへのあいさつを押し付けてすまない。」

「いえ、副担任ですから。」

山田先生の口調が熱っぽい、なんならこのクラスのJKの視線も熱っぽい。嫌な予感がする、この空気感の高まり・・・来るぞ！対シヨック対音響防護！（ただ耳に手を当てただけ）

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新Z

抑えた手を貫通する黄色い悲鳴で、私は一瞬気を失った。

次に目を覚ました時に私を出迎えてくれたのは視界いっぱいのはの机の天井、それと山田先生の声だった。

「早見君！大丈夫ですか!？」

「・・・はい、なんとか。今は何を・・・？」

「馬鹿どもに当てられたのか、まあ仕方ない。とりあえず自己紹介を頼む。」

「あー、微弱的なIS適性のせいで高校生活をやり直す羽目になった早見星夜だ。年上だが今は同級生だ、気軽に話しかけてくれ。得意なのは機械、好きなものは「そこまででいい、時間が押しているんだ。」：よろしく頼む。」

「よし、では授業を始める。まず最初は――」

織斑先生の話を聞きつつ、事前にもらったパンフレットの内容を頭の中に思い浮かべる。

・・・2人一部屋の寮か・・・男子であることを考慮して一部屋丸々使えないだろうか？

しっかりと授業を頭に入れながら、少しだけ口元が緩むのを感じた。

## 淑女とアホと宇宙馬鹿

IS学園初日。1時間目、ISの基礎理論について。それに2時間目の普通科。

あのー、本職のエンジニア、それもIS研究してAX作った私に何をいまさら学ばせる気なんでしょうか・・・あー・・・AXの代表とJADVの所長と早見星夜が同一人物だったことは公表してないか。AX所属の民間研究社ってことになってたな、建前は。まあとにかく、話半分でも高校分野くらいはわかる。

一夏君が「ほとんど全部わかりません！」からの参考書捨てましたコンボ決めて出席簿のオリムラ・アタック一撃で爆散したのを横目に、ΩネットワークでX-5の緊急改修プランを練って時間をつぶした。

休み時間まで一気に話は飛ぶ、22歳が高校の授業を受けているだけの絵面に需要はないだろう。

「ちよつと、宜しくて?」

「へ?」

「・・・」

授業中ではないことをいいことに2台の仮想コンソールとイメージ・インターフェイスを使ってゴリゴリ作業していたが普通に話しかけられた。一時保存と展開領域の格納を大急ぎで済ませて声の主へ向き直る。

・・・わーお、IS学園には美少女が多いと思っていたが特別美人さんだ。

閉じかけていたコンソールの一つに生徒情報を表示・照合する・・・イギリス代表候補生!?

「ちよつと、聞いていますの!?!」

「ああ、失礼。作業の片づけに若干手間取った。要件を伺おうか、イギリス代表候補生セシリア・オルコットさん?」

非礼がないように、かつクラスメイトとして適当な距離感で応答する。一介の技術者に貴族のご令嬢の相手は少々荷が重i・・・え、オル

コット家当主様ですか!?(コンソールを見ながら)

「・・・一つ聞いていいか?」

オルコットさんがちようど話し出そうとしたあたりのタイミングでおもむろに口を開く織斑。

「何だ(かしら)?」

貴族相手の応対なんてやったことねえぞ一夏君が話してる間に時間を稼いで最適な応対を考えろー

「代表候補生って何?」

「嘘だと言ってくれよ一夏くん・・・」

「あ、あ、あ、あなたっ、本気でおっしゃってますの!」

「読んで字のごとく、国家代表の候補。入学当初からそれに選ばれてるってことは相当な実力者ってことだ。普段テレビを見ない私が言うのもなんだが、もう少しニュースを見たらどうだ?」

「ちよつとひどい言われようじゃないか?」

明らかに不満げな顔でこちらを見てくる一夏君、だがそれ以上に私は不機嫌だ。

「ついでに言うとオルコット家はイギリスの名家だ。非礼にならないようにこつちが気を揉んでいたところで無神経で無知丸出しな発言をされたらこうも言いたくなるさ!」

おつとついな本音が。

「ちえー、早見さんはオルコットの味方なのかよ。」

「あら。そのとは違ってよくご存じで。」

「いや、さつき調べた程度のことしか知らないさ。その分オルコットさんを待たせてしまったがな。」

「いえいえ、下々のことを気にかけるのも貴族の務めですわ。そこでですが、代表候補生で入学試験で唯一教官を倒したエリートたる私がチャンス差し上げますわ!私に泣きつくというのであれば、貴方達にI Sについてー」「いや、そんなのいらないうって!な、早見!それに教官なら俺も倒したし。」なっ!」

え、教官を倒した?代表候補生クラスの實力が、搭乗時間ほぼ0の織斑に・・・?

虚言・・・打はなさそうだな、このどや顔。マジかよ、教官側が自滅したとかそういうオチじゃねえだろうな（名推理）

キーンコーンカーンコーン

ここでタイミング悪くチャイム、不味いな。オルコットさんの神経を馬鹿が逆なでするだけになってしまった。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

あ、武装。忘れてた。

ダメージが大きいが大気分子に阻まれて減衰が激しい荷電粒子<sup>プラズマ</sup>。

威力が高いが初速がどうしても遅くなる炸薬。

速度に依存する物理弾。

即時着発の代わりにエネルギー効率を捨てたレーザー。

それに極近接戦用のブレード。

ISの武装というのはこの5つに大きく分けられる。

問題はどれも試作機であるX-4には積んでないってこと。X-5には搭載可能なハードポイントがあるにはあるが・・・

「そういえば、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておかねばな・・・」

「代表とはいっても出場までにやることはせいぜい雑用くらいだ。自薦他薦は問わない。我こそは、もしくは彼、彼女こそはというものは名乗り出るといい。」

仕方ない、シユタットメタル製130mm戦車砲あたりをIS仕様にするか？

「織斑君を推薦します！」

「私は早見さん派かなー」

今自分の名前が呼ばれたような。

「織斑、早見。他にはいないか？」

え、は？ちよつと待て、クラス代表？代表戦？うせやろ、AX、IS学園仕様にまだ更新してないんだが。専用機として登録した以上、万が一私が代表になろうものならまだ第1・5世代相当のX―4かX―5で出なければならぬ。

「すいません、辞退します。代わりに言うては何ですが、セシリア・オルコットを推薦します。」

大急ぎで立ち上がり、辞退の意を伝えたうえで「何で男風情が」でも言いたげなぐぬ顔のオルコットさんを推薦しておく。

「当然ですわ！ぽつと出の男風情よりイギリス代表候補生のこの私のほうがふさわしいのではなくて？」

よかつた、オルコットさんが乗り気で。X―4はフルスケール有人試験機で、X―1（基本システム検証無人機）、X―2（有人試験機）、X―3シリーズ（各部モジュール及びプラットフォーム機能検証機）を統合しただけに過ぎない。要するに武装を積んでいないどころか航行用モジュールの塊なのだ。積める武装も積む機体も開発を今から始めるって段階だからな。

ISバトルなんかできたもんじゃない。このまま俺は華麗にフェードアウト

「俺も辞退・・・やっぱりいいや。」

おいしいいい!?織斑あ！辞退する嬢のかしないのかはつきりしろ、そんな半端な態度はオルコット嬢の神経を逆なで・・・あっ（察し）さてはこいつ、「俺が辞退したらこのアマが代表か、それはやだな」とかそんな程度の理由で意見変えやがったな!?

「納得いきませんわ！イギリス代表候補生を差し置いて物珍しさだけで知性も気品もない、挙句の果てにやる気すらも感じない男が推薦されるなど！」

オルコットさんブチ切れ、そりやそうだ。

「イギリス代表候補生イギリス代表候補生ってうるさいな、大体イギリスって――

「ストップだ、織斑」なんだよ早見！」



代表候補生であり祖国を背負う覚悟を持ってきてる人に対して、その国を馬鹿にする発言は看過できない。ましてや私怨による無関係なところから相手をけなすためだけに飛ばされる馬頭など、あつてはならないんだ！というかこれ以上オルコットさんを刺激するな！

「・・・わ」

「？」

「決闘ですわ！身の程というものを教えて差し上げますわ！」

「おういいぜ。で？ハンデはどのくらいつける？」

うっそだろお前。クラス中から爆笑、妥当だ。むしろオルコットがハンデをつける側では？代表候補生とずぶの素人やぞ？もういつそのことコイツボッコボコにしてくれねえかなオルコットさん。

「貴方はどうしますの？その馬鹿と一緒に相手して差し上げますわよ？」

「ああ、私は——」

「そこまでだ。いったん席につけ、織斑、オルコット、早見。」

あの？辞退の言葉くらい言わせて？

「——いい機会だ。ちょうど一週間後、月曜日の放課後なら第三アリーナが空いている。そこで、だ。ISバトルを行って代表を選出するものとする！「待てよ千冬n」織斑先生だ、拒否権はない！」スパーン！

うそーん・・・